

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720177

研究課題名（和文）近代日本語における非情物主語受身文の発達—可能動詞の発達との関連をめぐって

研究課題名（英文）The development of inanimate subject passive in Modern Day Japanese—On the influence of the development of potential verb

研究代表者

志波 彩子（SHIBA AYAKO）

東京外国語大学・外国語学部・研究員

研究者番号：80570423

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治期の雑誌『太陽』の電子コーパスからラレル述語文の用例を抽出し、どの年代にどのようなラレル文のタイプがあったかを、特に受身用法を中心に調査した。日本語の受身文は、近世以前には非情物が主語に立つタイプがほとんどなく、非情物主語の受身文は、近代以降急速に広まったと言われているが、実際には評論・論説などの固い書き言葉の文体では、明治期にすでにいくつかのタイプの非情物主語の受身文が存在し、使われていたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the passive usage of the particle -rare- in Corpus of Meiji and Taisho periods. It is said that there were few types of inanimate subject passive in Japanese before Edo Era and they spread out after Meiji period. We found out what types of inanimate subject passive there were in Meiji written text.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：日本語学・日本語文法

キーワード：受身文、非情物主語、非情の受身、可能動詞、ラレル、太陽コーパス、自発、可能

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の研究で、日本語の受身文は、近世以前には非情物が主語に立つ受身文の類型が非常に限られていたことが分かっている。そして、近代以降、欧文翻訳の影響で非情物主語の受身文が急速に広まったと考え

られている。しかし、非情物主語の受身文がどのようなタイプから、どのように日本語のラレル文体系に定着していったのかはいまだ明らかにされていない。

(2) 本研究は、近世以前の日本語に非情物

主語の受身文がほとんど存在しなかったのは、日本語のラレル文が可能用法と自発用法を発達させていたからだと考えた。「本-ガ読マル」という文は、近世以前の日本語では、「私が意図していないのに、自然に本を読んでもしまう」という意味（自発用法）になり、「（私は）本が読まれない」という文は、「私が読もうと意図しても、当然起きるはずの事態が起きない」という意味（実現系不可能用法）を発達させたのだと考えた。

しかし、近代以降、「本が読まれる」といった非情物主語の受身文は、急速に日本語に定着していった。これには、明治期に多数の欧文が翻訳されたことが影響していることは間違いないだろう。と同時に、本研究は、その頃すでにラレルが、受身用法専用の形式へ移行しつつあったからだと考えた。すなわち、「自発用法」はすでに一部の思考動詞及び感情動詞に用法が限られ、生産性を失っていたし、「可能用法」は四段活用動詞において新たな接尾辞（-e）を獲得しつつあったのである。現代語では、現在、一段活用動詞における「可能用法」のラレルからの分化が進み、いわゆる「ラ抜き言葉」という現象が現れている。これは、可能の用法がラレルから独立して、ラレルが受身専用の形式へ移行する過程に過ぎないと見る。このような、ラレル接辞自身の意味領域の変化により、ラレルは非情物主語の受身文を受け入れる体制を整えつつあったのだと仮設した。

2. 研究の目的

本研究は、近代以降、日本語のラレル文体系に非情物が主語に立つ受身文がどのようなタイプから、どのような頻度で定着していったのかを明らかにすることを目的とした。また、非情物が主語の受身文が定着していく過程に、ラレル文において五段動詞の可能用法

が消滅し可能動詞に移行していった過程が連関しているかどうかを調べることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 明治から大正にかけて出版された雑誌『太陽』の電子コーパスからラレル述語文の用例を抽出した。各年代のすべての号について用例を集めると多すぎるので、1895年、1901年、1909年、1917年、1925年の各年の5月号のみを対象とした。また、ジャンルをより厳密に絞るため、対象は評論・論説文に限り、小説の用例は削除した。

(2) 抽出した用例はエクセル上で、不要な用例を削除し、まず、受身・可能・自発・尊敬に分類し、受身用法をさらに有情主語か非情主語かで分類した。そして、非情主語の受身文については、動詞の語彙的な意味を中心にタイプ分けし、分布を調べた。

非情物主語の受身文の意味的なタイプについては、拙稿『現代日本語の受身文の体系—意味・構造的なタイプの記述から—』（2009年 東京外国語大学、博士論文）におけるタイプ分けを参考にし、状態変化型、位置変化型、所有変化型、結果型（生産動詞）、表示型、実行型、無変化型（接触動詞）、知覚認識型、知的認識型（思考動詞）、発見的認識型、言語活動型、判断型（見なされる）、意義付け型、要求型、表現型、存在様態型、抽象的存在型、存在確認型、社会的評価型（重視される）、社会的関心型（注目される）、社会的約束型（禁止される）、特徴規定型、論理的操作型、限定型、現象型、関係型といった、細かいタイプに分類した。

4. 研究成果

(1) データの整備にあたって、用例の解読が思いのほか難しく、分類には時間がかかった。しかし、ラレル文以外の例を削除し、各

用法に分類し、1895年、1901年、1909年、1917年、1925年の各年の5月号のラレル文のデータが得られた。

(2) 非情物が主語に立つ受身文のタイプを、動詞の語彙的な意味を中心に取り出した。これにより、各年にどのような非情主語の受身文が用いられていたかが明らかになった。これまで、明治期の小説を対象に非情物主語の受身文を調査した研究はあったが、より固い書き言葉文体の論説・評論ジャンルにおいて非情物主語の受身文がどの程度使われていたのかは、明らかにされていなかった。本研究の調査により、明治期の書き言葉において、すでにある程度の非情物主語の受身文が存在したことが明らかになった。

例えば、もっとも古い1895年でも、すでに「用いられる」などの使用を表わすタイプや、「行われる」などの執行を表わすタイプはかなりの頻度で現れる。ただし、著者の中には一度も非情物主語の受身を用いない者もあり、出現するタイプもかなり限られている。一方で、「品節せられたる」や「秩序せられてある」など、現代日本語には定着していない動詞の用例も見られる。

これが、1925年になると、用例数もタイプも増加する。特に、「言われる」といった言語活動を表わす動詞や、「運ばれる」のような位置変化を表わす動詞などもかなり定着している。

(3) 当初の目的とは別に、「見える」と「見られる」が推定を表わすようになった過程に興味を持ち、これを調査した。太陽コーパスと戦後の評論文コーパスを用いて比較した。「見える」については、その推定表現「節-と 見える」は、戦後のコーパスでは減少し、代わりに「(よう)に見える」というパターンが増加していることが分かった。一方、「見られる」は、太陽コーパスでは「見られる」

自体の用例が非常に少なく、戦後コーパスで大幅に増えていた。これは、「見られる」の存在確認（「多くの人に肥満の傾向が見られる」等）タイプが戦後コーパスで著しく増加したためである。一方で、「見られる」は、戦後の評論文コーパスには推定の「節-と 見られる」はほとんど用いられない。ただし、戦後の報道文（新聞）コーパスで高い頻度で用いられ、報道文のジャンルで発達した表現であることが明らかになった。

これ以外に、太陽コーパスでは「見える」による存在確認の構文タイプ（場所にモノ/コトが見える）の割合が非常に高かった。特に、現代日本語ではあまり見られないが、「本/文書-に 情報-と 見える」といった用例が高い頻度で現れる。しかし、戦後コーパスでは「見える」の存在確認のタイプはかなり減少した。これと並行して、先に述べたように、「見られる」の存在確認タイプが戦後コーパスで著しく増加した。つまり、「見える」による存在確認の用法は、戦後、「見られる」に取って代わられたと考えられる。

また、形容詞句を伴って「青く/高そうに見える」といった様態を表わす構文タイプは、「見える」では用例があるが、「見られる」ではほとんど例がない。つまり、この構文タイプには「見える」がふさわしい要素となっていると言える。ただし、これは対象が非情物の場合で、対象が有情者の場合には「見られる」も形容詞句と結びつく（この場合、意味は受影の受身となる「彼女は若く見られる」等）。

なお、「見える」と「見られる」については、いずれも、項が1項である「対象-ガ 見エル/見ラレル」を単純知覚タイプ、「対象-ガ 形容詞ク/形容動詞-ニ 見エル/見ラレル」を様態タイプ、「場所-ニ 対象-ガ 見エル/見ラレル」を存在確認タイプ、「対象-ガ 判

断内容-ト/ニ 見エル/見ラレル」を判断タイプとして、大きく4つに分類した。「見られる」のみ、この4つ以外に、有情者が主語に立つものを「受影の受身タイプ」とし、各タイプの割合を調べた。

「見える」と「見られる」による推定表現は、その存在は認識されていながら、従来ほとんど研究されてこなかった。本研究の調査により、「見える」と「見られる」にどのような構文タイプ（パターン）があり、また、それが明治期と戦後でどのように用いられていたか（分布していたか）が明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

① SHIBA Ayako, “Changes in the Meaning and Construction of Polysemous Words: The case of mieru and mirareru.” . *Corpus-based Analysis and Diachronic Linguistics*, Eds. by Y. Kawaguchi, M. Minegishi and W. Viereck, John Benjamins, pp. 243-264, 2011年. 査読有り

6. 研究組織

(1) 研究代表者

志波彩子 (SHIBA AYAKO)

東京外国語大学・外国語学部・研究員

研究者番号： 80570423